

CONTENTS

- P1 わが館のイチ押し
現代美術の展覧会とその記録集
- P2 館長随想『開館20年目を迎えて』
(岡山県立記録資料館 館長 杉山 一雄)
- P3 令和5年度第2回研修会「作品の取り扱い」
参加者感想:岡山城天守閣 学芸員 原田 莉沙子
- P4 令和6年度総会報告
- P5 記念講演会
- P6~P7... 加盟館からの便り(勝山文化往来館ひしお)
- P7 賛助会員一覧
- P8 気になる情報コーナー「小野竹喬筆《波切村》が
国の重要文化財に」(笠岡市立竹喬美術館)

岡山の博物館

岡山県博物館協議会会報



真庭市蒜山ミュージアム

学芸員 三井 知行

「現代美術の展覧会とその記録集」

2021年7月にオープンした真庭市蒜山ミュージアムは、現在活躍中の美術家の紹介を中心に、年3回程度の展覧会を開催しています。ミュージアムという名称ですが館としてのコレクションのないアートセンター的な施設です。



原田要展 会場風景



山部泰司展 会場風景

さて、所蔵作品がない館で何を「イチ押し」にすべきか。普通に考えると隈研吾設計による建物(建築)なのですが、建物は東京・晴海にあった「CLT Park Harumi」を移築したもので、設計時点では美術作品を展示することが想定されていなかった建物を「イチ押し」というのも、何か隈さんに失礼な気がします。と考えると、自分の仕事で恥ずかしくはありますが、やはり自主企画による展覧会が「イチ押し」になるのかな、と思います。展覧会は開催中のものを除き形がないので、その記録集と併せて「イチ押し」としたいと思います。

館の大きさもあり、展覧会は基本的に個展か二人展。現在活動中の美術家なので、展示のみならずトークやワークショップなどイベントを多く開催し、学校や他の博物館などと連携した活動を行っています。

ではどんな作家にお願いすべきか。最先端のイキのいい

若手ばかり紹介するのはちょっと違う。逆に観客や流行におもねたもの、自然との共生やSDGsを表現していると言っちゃう人も芸術として持続可能とは思えません。地元出身者を無条件に優遇すべきではないし、それを当然と考えるような作家は論外ですが、地縁は大切にしたい、地元作家を応援したい... といろいろ考えた結果、ごく私的なものですが、指針めいたものが生まれました。

すなわち

- ・真庭の人に見せたいと思える作家
- ・表面的な「感性」や安易な「感動」よりも、「知性」を刺激する作品
- ・若手、中堅、ベテラン関係なく、もちろん性別も関係なく紹介

です。

また、開催される現代美術展では、作家を招聘しない冬季の展覧会を除き、記録集を制作しています。図録でなく事後的に発行される記録集なのは、展覧会準備と並行して図録を作るほどマンパワーがないこともありますが、会場が個性的なため展示風景を多く掲載したいという意図もあります。これらは作家にとっては自身の活動を広く伝え次に繋げるツールとなり、館にとってはコレクションに代わり館の方向性と実績を伝えるものになると考えています。



柴川敏之展 記録集

なきりむら

小野竹喬筆《波切村》が国の重要文化財に

笠岡市立竹喬美術館
学芸員 柴田 就平

小野竹喬が大正7(1918)年の第一回国画創作協会展に《波切村》を出品してから、今年で106年が経ちました。波切村は、現在の三重県志摩市大王町にあった漁村で、「絵かきの町」として現在でも知られており、竹喬在世時から多くの画家が訪れる写生地でした。

《波切村》は、絹本着色の四曲一双屏風で、向かって右に朝の波切村、左に夕焼けの波切村が描かれており、波模様も風いだ海と荒れた海とでそれぞれ違っています。また、水平線の位置は左右ともに同じですが、左右一続きではなく、それぞれ異なる視点から波切が描かれています。

このたび《波切村》が、3月15日に開催された文化審議会から文部科学大臣に、国の重要文化財に登録することが答申され、8月27日の官報告示をもって正式に国の重要文化財となりました。同時に、

同じ大正期の竹喬作品には、第10回文展で特選を受賞した《島二作》がありますが、《波切村》が重要文化財の指定を受けた理由として、風景画としての重要性に加え、国画創作協会の第一回展に出品された記念碑的作品である、という点も見逃せません。

大正時代は、旧来の日本画から新しい日本画へ変わりゆく大きな転換点にあり、竹喬たちが設立した国画創作協会は、まさに日本画の新時代を象徴する団体として、日本絵画史上においても高く評価されています。

これまで、国展出品作の中から、第一回国展から土田麦僊の《湯女》(東京国立近代美術館蔵)、第二回国展から村上華岳の《日高河清姫図》(東京国立近代美術館蔵)、第三回国展から華岳の《裸婦図》(山種美術館蔵)が国の重要文化財に指定されており、《波切村》を



絹本着色、四曲一双、大正7(1918)年
笠岡市立竹喬美術館蔵

《波切村》に関わるスケッチ9点と習作1点の画稿10面が附指定となっています。

《波切村》が制作された当時、竹喬に感化された若手の日本画家たちが描く風景画が、「竹喬派の山水画※」と呼ばれるほど、竹喬の風景画は、大正時代中頃の京都画壇において、風景画の様式を牽引するとともに、典型的な様式の一つとして認識されていました。

含め大正時代の日本画で重要文化財に指定された14点のうち、4点が国展出品作品であるということは、国画創作協会が画壇に与えた歴史的な影響を、国も認めていることの証左といえるでしょう。

竹喬美術館は、竹喬芸術の殿堂として、《波切村》をはじめとする竹喬作品を通じて、竹喬が愛した自然への深い眼差しを、これからも伝えていきます。

※大正12年に竹橋から竹喬に改号

岡山県博物館協議会会報

岡山の博物館

No.66 令和6年9月発行

編集・発行 岡山県博物館協議会

会長 守安 収

事務局

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48

岡山県立美術館内

TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648